

「何もかわらない日常」

甲南中学校 二年 小森 勇輝

「何もすることないなあ、何かないかな。」

部活がなかったりして暇な時間をもてあましていた夏休み。そんな中テレビをなんとなくつけた。そこに映ったのは広島の人達が黙禱している姿だった。今日の日付は八月六日。広島に原爆が落とされた日だった。改めて戦争の悲惨さや残酷さを感じる日。改めて日本が平和だなと感じる日。そしてもう二度と戦争というものをしてはいけないと再確認する日。原爆という爆弾が一瞬にして広島の人々の尊い命を奪っていった。それは決して許されることではない。広島だけでなく日本中の人々が心に深い傷を負ったのだろうと思った。

戦争について考えはじめたのは小学校四年生ぐらいのころ。お正月に親戚の家に遊びに行ったとき、ある話をしてくれた。その内容にはとても驚き、想像のはるか上をいった。

「私はね、満州に行って、引きあげ船で日本へ帰ってきたんだよ。」それから戦争のときの話をしてくれた。そのときはまだ、一つの話としてしかとらえてなく月日が経った。この話を思い出したのは、約二年後の小学校六年生のときの社会の時間で、第二次世界大戦について学習したときだった。そこで各地にいた人々が引きあげ船に乗って帰ってきたということを知り、そのときに思い出した。満州から船で帰ってきたという話を。そのとき、身近にそういう話をしてくれる人があるということがどれだけ貴重かということに気づけた。戦争について知るといって知るといってチャンスに恵まれて良かった。貴重な経験だった。

本を借りに行こうと市立図書館へ行った際、ある一枚の写真を見つけた。それは戦争によって燃えて残った建物跡などが写されたものだった。鹿児島にも被害がここまで及んだのかと思うと心が痛む。

しかし、それと同時にこういう写真は永遠に遺していかなければならないなと思った。こういうものが平和な世界への願いなのではないだろうか。昔、戦争があり、多くの尊い命が失われ、鹿児島は、日本はこういうことになってしまった。もう二度と戦争をしてはいけない、させてはいけないと僕たちへ教えてくれるものだと思う。たった一枚の写真に、戦争で亡くなってしまい未来が閉ざされう二度と戦争をしないで、明るい日本を創ってほしいという願い、希望が詰まっている、そんな写真だと思う。こういう写真には、戦争で亡くなったり、戦争で最愛の家族を失ったりした人々の想いというものも、目には見えないがしっかりと写っていると思う。

平和への第一歩は争いをなくすこと。国どうしの争いが戦争だ。しかし、僕ら一般人が国どうしの争いをなくすことは不可能に近い。「戦争をやめて。」と一言言っただけでなくなることはない。だって、まず、自分達ができることはなにか。それは身近な争いをなくすことだと思う。「塵も積もれば山となる」ということわざがある。これは、小さな争いが増えていくとやがて大きな争いへとつながる。そう置きかえられると思う。意見の食い違いや人と自分が合わずに口論や争いになると思う。それはしょうがない。人は一人一人が違う。それが個性で大切なものだ。そのような小さな争いは話し合いで多くは解決する。互いに腹を割って話し合いをすれば。小さな争いがなくなる。大きな争いもなくなるはずだ。

写真。それはただの紙切れかもしれない。でも、あの写真にはたくさん人の想いが写っている。そして、二度と戦争をしてはいけないという一種の戒めかもしれない。

ただの紙切れに、人々の悲しみ、苦しみ、怒りがつまっている。しかし、それ以上に、人々の明日への希望、願いが込められている。鹿児島が、日本が、世界中が平和でありますように。